



さか立ちをすると、頭に血がのぼるのはなぜ

頭に血がのぼるひみつは

さか立ちをしたり、鉄棒にさかさにぶら下がったりすると、頭に血がのぼり、顔が赤くなります。逆に、立っていても、血が足に下がったままということはありません。

わたしたちの体の中を流れている血（血液）は、心臓から出発し、体じゅうを回って、また心臓へ帰ってきます。行きの血管が動脈で、帰りの血管が静脈です。じつは、さか立ちをすると頭に血がのぼるのは、この静脈の中にある、「弁」にひみつがあるのです。

弁のはたらきは

では、血（血液）が心臓から足へ行き、帰ってくるまでを考えてみましょう。血（血液）は心臓から足へ、上から下へ行きますが、帰りは下から上へ、つまり、重力にさかたって、ふつう水が流れ落ちるのは、反対の方向に流れているのです。

この流れを助けているのが弁なのです。

静脈の中には、血液がぎゃくもどりしないように、内側に小さな門のような弁がたくさんついており、血液が一方向だけに流れるようにしています。そのため、立っていても、血が足に下がったままということは起こらないのです。

ところが、頭の中にある静脈には、このようなはたらきをする弁がありません。そのため、さか立ちをしたりすると、頭へ流れてきた血液がもどることができず、たまってしまいうため、頭に血がのぼることになるのです。（監修・保志 宏）

